

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	効頭放語 : 雜録
Author(s)	瀧川, 愼夫
Citation	龍南會雜誌, 75: 51-56
Issue date	1899-11-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5409
Right	

啼泣する今日に至らんとは、嗚呼悲哉。

氏が短き生涯は、極めて慘憺たるものなりき、されど、又極めて美なる崇なるものなりき、手は氏の生涯を想ふ毎に、詩人ヘン、マヨンソンの句を、想起するを禁する能はざるなり。

Although it fall and die that night, It was the plant and flower of light.

In small proportions we just beauties see; and in short measures life may perfect be.

郊頭放語

瀧川 愴 夫

郊頭に踞えて落日の慘たるを望み呵々とて俗世の紛々たるを笑ふ、人目して狂となさんか、吾が關する處に非ず、乞ふ吾が信ずる處を聞け。

世には一種の厭世家あり、人生を夢の如きと云ひ、五十年の歲月を浮游の一生に比し、無常を説き、寂滅を唱へ空理に走り清談を事とし或は一生を三分五厘に渡らんとす。又一種の哲學者あり自然の運行の極めて崇嚴に極めて偉大なるを見て、自己の能力の之に比えて極めて微弱を哀れるを思ひ、神驚膽悸、たゞ憂ひたゞ嘆き、無爲に世を渡らんとす。上は老莊竹林の徒より下は今日の所謂新牀詩人と稱せらるゝ者に到るまで、東洋の所謂詩人と稱せられ歌人と歌はるゝもの、殆ど此思想を抱かざるものなく、又此思想を抱かんと欲せざるものなかりき、之れ共に甚しき病的の思想なり、誤謬の思想なり。余は聊か之に對する余の所信を陳べん。

彼等が五十年の一生をかの無窮の永劫に比するは、抑も此病的誤謬の思想か因て始まる處にして、人類が有する得蜀望驪的の慾望心より来る必然の結果なりとは云へ、かの不老不死の仙藥を求めし秦始皇の愚と相及ぶもの也、唯彼等が之を求めて得べからざるを知りて自暴自棄に陥れると、始皇が其得べからざる知らずえて態々船を東海の孤島に送りしとの差あるのみ、又自然の偉大なる運行を見て之を人類の一微分子たる自己一個の能力に比較せんとするも、人類通有の自貪心を表白せるものにして、潜越の甚しきもの也、之も泰山を狭みて北海を越ゆるの類、たゞ識者の一笑を買ふに過ぎず。彼等は吾人か個人的に此世に生れ來しものにあらずして、古今未來を通じて、即ち已に生れ來て、また將に生れ來んとする人類なるものゝ一員とまで生れ出しものなるを知らざると見ゆ。かの大自然に比較するには人類全体の事業を以てせざる可からず、さればその五十年の一生をかの万古永劫に比する如きは不當の事にして其比例を失するは當然の事。もとより比較すべきものに非る也。個人的自己を立脚地とせるかの似而非哲學者はいざ知らず、人類の一員たる吾人は、かの大自然に對えて崇高偉大の頌を呈するものにはあれども、直に自己の能力と比較して、無能無力を憂慮するを欲せざる也。試みに頭を廻して、過去に於ける吾人の祖先が此世界に印せる足跡の如何に偉大なるかを檢せよ。歴史は此點に於て偉大なる趣味を吾人に與ふ。

開闢混沌の世、清者浮きて天となり濁者沈みて地となりし古、或は造物者が持てる鑒に人間てふ者が刻み出されて靈魂てふ息を吹き込まれ之を太古の時代は知らず、アダム、イブ乃至伊弉冊、伊弉諾尊が此世にあれ出し時代も知らず、有史以後に於て之を徵するも草莽太古の世より文化滂々たる今代に到る迄の人類の功績進歩の偉大にして光明ある誰か一驚を喫せざらん、此數千年の間人類の興廢存

亡、國と國との吞噬攻伐は人類の歴史に汚點を残すものなれども、人類の進歩を論するに當りては寧ろ一個の手段否經歷とて見るべく、あながちに非し去る可からざるが如し。試みに太古に於て、氣候に制せられ禽獸に迫られ、即ち自然に這はれ乍ら水草を追うて僅に生活を營し時代と今日山を鑿、海を煮、電を驅り、風を御し、山靈河伯を驚えて自然と追求し、いよく人類の光榮と快樂とを増さんとする時代とを比較せよ。そゝるに吾人をして人類は自然を凌駕し得るものにはあらずやとの疑を懷かしむるに非ずや。もとより自然の懷裡には、一種犯す可からざる魔力の存するありて、到底之を凌駕する能はされども、人類が之に對して自己の位置を占むる丈の余地は充分存するを疑はざる也。かく論じ來らば人或は難せん、汝は物質的の進歩を以て直に人類の進歩となすか道徳上に於ては人類は却て退歩せずやと。之れ一理あるが如し、而も近眼者流の謬見に過ぎず、いで其故を辨せんか、凡そ進歩なるものは局部に於て之を論す可からず之を全般に見て其首尾を比較し而て後始め之を決す可し。例へば球を地上に轉すか如し、地に面する一半は常に後方に向つて動くを以て、此球は退歩すといふありと爲す勿れ、球の進めるは球全体の進程に於て之を檢するを得べき。今代明治の道徳が徳川封建の時代に比較して退歩せりとも未だ道徳退歩を云ふ可からず、鎌倉時代の武士道は藤平二氏の代に於ける、道義癡癡の反動として見る可く、戰國時代の垂離敗亂は徳川時代に於ける儒教復興の前波たり、徳川氏倒れて明治の聖代となる、今代の道徳が果えて徳川時代のと比して退歩せるか否やは別問題として、兎に角一張一弛は事物進歩の常態なれば、眼を古今に通えて道徳興廢の蹟を攻ふるに、吾人は古今に通ずる退歩の證據を見出す能はさると共に進歩の跡はかの物質的の進歩の如く甚しからざるも、歴々として之を見出すを得る也。吾人は支那史に於て果して孔孟の稱ふる堯舜の如き

聖賢ありてかの老莊の徒か夢想する如き無爲至樂の時代がありし事を信する能はざると共に、此時代を以て道徳最高潮の時代となす能はず。所謂無爲の時代とは無道徳の時代なりとせらる。斯く云はば人又難せん道徳なきは道徳の眞趣なりと、之れ人類極めて稀小にして、自他を知らざる時代に於てこそ稱ふ可き議論なれ。苟くも生殖が人類自然の道にして、社交的は人類の性質なる以上はかゝる議論は人類に適用す可からざるの議論なり。然らば經書の著述、宗教の發生、倫理學の唱導、法律の制定の如き皆道徳の進歩を證するものに於て、今日は此等の發達播布の途にあるものなり。是等のものを生ずるに至らしめたる罪惡の發生は、人類本來の性質と、人口増加の必然の結果ととて起る競争との間に生み成されたる人類の弱點のみ、之を以て直ちに人類道徳の退歩を云ふ可からず、罪惡發生の多少は境遇を參考せざる可からざる也。要するに道徳の進歩は物質的の進歩に伴はずと云ふを得るも是等か相反すと云ふは一個の謬見なり。

此の如く時と勢との間に流れ出でたる人類進歩の潮流ほど偉大に目覺しきはなき。滔々たるアマゾンの大河が萬石の水を吐きて日夜大洋に朝するもかくや。而も其源を尋ねれば葉末に滴る露の雫、岩間をまばる泉の流れが、集りくゝて細流となり小川となり、始めは落葉を潜ぐる逃げ水の細さも、羊飼ふ野中の細流となり、旅客渡舟を呼ぶ中流となり、此の如きもの集りくゝて、終に滔々たる大河となりて、洋々海に朝するに至れる也。進歩の流れも亦此の如し、其末を見れば太き流れの、如何にまてかくはと驚かるゝものも、其源をたづねれば、古來幾千萬幾億萬の人が、各其葉末の露岩間の雫にも例へつ可き微力を振ひて、科學に、文學に、實業に、はた世のさまぐの事業にたづさはりて、働さくし其結果のつもりくゝて此く大なる流れとはなれる也。是によりて之を見れば、吾人の力微な

りども之を侮る可からず之を棄つ可からざるを知る。

更に一步を進めんか、吾人か理想と之目標として仰ぎ進む真理の發見、眞の自由の如き理論の實現は例令女を男となす能はざるのみと誇る英皇の權威を以てするも耶蘇釋尊の聰明を以てするも一個人の力を以て完成する能はざるは、歴史に徴して明かなる事に於て、之を自己一人にてなさむと欲ふ（或は欲せずとも）自己の無能無力を嘆き自暴自棄に陥らんとするは愚の至極と云ふ可也。吾人の理想とする理論の實現は、かの萬古に屹然として聳ゆるピラミットの如きか、而して吾人の勞力と勤勉とは、かのピラミットを築き上ぐる爲めの一片の石のみ。吾人が爲す處のものの小に於てピラミットの全形を形り成す能はずとも、之を築き上ぐる一助たり一階級たるを得るを思へば、一舉一動と雖も希望と喜びとを以て働かざる可からざる也。要するに吾人は進歩の犠牲となるもの也。これ唯吾人人類に於て見るのみならず、無情の禽獸草木の如きも亦然り、蠢々として動き蓬々として生ず、一見何等の爲す所なく、無用に生れ無用に死するが如き、而も仔細に觀じ來れば、一蟲一草の微と雖も、皆自然淘汰の法則に従ひ、進化の犠牲となり居るもの也。宇宙の調和は茲に成り、茲に遂ぐべし。吾が爲す所のもの、萬世の進歩に比すれば、獻貢する處秋毫も管ならざるも、而も此小集りてかの大となるを見れば、誰か大海の一粟としてケナシ去るものぞ。吾嘗て之を科學者に聞く、一針子を地上に落すも、其影響は全宇宙に及ぶと、事荒唐に近けれども理は一なり。吾が所業微なりとも何ぞかの理想の域に達する一步たらずらん。あはれ永劫と刹那、千里と一步、其懸隔の甚しきを見て驚く勿れ、悲しむ勿れ。一步は一步の進歩なり、刹那は永劫の單位なり、千里と永劫と畢竟するは一步と刹那とに始まる。五重と塔を望みて、一躍頂上に登り得ざるを悲む勿れ。殘果敢なる厭世家たちが憂慮煩悶する處、多く

は此類のみ。吾乃ち叫んで曰く吾は吾が力を知る、故に之を重むす。人なき曠野に危言を恣にする事多時、冷風颯々、落葉を送りて吾が面を打つに驚けば、世は既に暗に落ちて滿目荒冷、仰き見れば天上の太白一點獨り霄の空を領して、萬古永劫の面影をはのめかすかぞを見え。〇

故郷の懷

想 一 峯 生

龍田山頭秋漸く老いて梧桐梢疎に、松風稷々の音、白川淙々の聲と相和えて、韻響何となくものごとし、三更人静まりて未だ眠に就かず、獨り衾を蒙りて武夫原を逍遙すれば、叢裡露深くまて蟲語唧々たり、阿蘇山頭の片月、宛然磨けるが如く、除々に清光を投じて下界を照え、滿田の黄禾亦一層の靄有り、鳴鳴此の天地の秋色は端なくも余をして故郷に就て思ひ起さめぬ、

人は皆故郷を愛す

I have never been enjoyed since I left my native land,.....

斯は是れ印度の英雄『クライブ』が、始めて愛戀の故郷を去り、數千里外の異郷印度王國に來り、眇たる商會の一手代となり、苦樂を共にす可き鄉黨親戚なく、懷襟胸底を叩く可き知己朋友なく、嘻々として鼻語を談ずる蠻族の間に蚤在し、汗背赭額狂起憤勵えて而も朝に一日の糧なきを苦みたる窮境又逆境の間に在りて時、彼が故郷に送りたる手簡の一片に非ずや、彼は故郷を去りて以來、嘗て一